

文芸思潮

DOCUMENT

第14回文芸思潮 **エッセイ賞発表**

最優秀賞 トドを殺すことは自分達を殺すこと

福島由華里

2019 秋 号

第13回 **まほろば賞発表**

キリギリス 中井ひろし

遠き春の日々

—— ぼくの高校時代 ——

三田誠広

ラオス秘密戦争と戦術核戦争

竹内正右

第 **73** 号

全国同人雑誌最優秀賞 第13回 まほろば賞 発表

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第一三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇一九年八月四日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。作品ごとに選考委員から率直鋭利な批評が発せられ、熱い議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただきます。また河林満賞には賞状・賞金五万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と記念品、優秀賞には賞状と賞金三万円・記念メダルを贈らせていただきます。

今回、授賞式は十月十九日に開催される第三回全国同人雑誌会議において行なわれます。どうぞ受賞者、同人誌主

催者、関連同人の方は御出席を賜りますようお願い申し上げます。全国同人雑誌会議は、全国の同人雑誌作家が一堂に集まり、危機に瀕している活字文化をどのようにして盛り上げ復興させていくか、重要な話し合いになります。同人雑誌の方だけでなく、文芸思潮の読者もフリーの立場から参加できます。ぜひたくさんの方が御出席し、活字文化の未来を切り開いて下さるよう、切にお願い申し上げます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にも多数の方が御参加ください、また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手でこの賞を育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の支持を切にお願いする次第です。

この結果また優秀作はインターネットでも発表される予定です。どうぞ御覧いただけましたら幸いです。



第13回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「キリギリス」

〔おこん〕21号

中井ひろし

特別賞

「坂を上りながら」

〔安藝文学〕87号

石田耕治

河林満賞

「スミオ」〔彩雲〕10号

緑町 優

読者賞

「サンバイザー」

〔弦〕103号

木戸順子

優秀賞

「刑事死す」〔海〕97号

宇梶紀夫

「森で」

〔安藝文学〕87号

武田純子

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目火美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

選評



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
日本文藝家協会副理事長
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学名誉教授

昨年を上回る見事な作品

三田誠広

この賞の選考を長く続けているが、昨年の候補作のレベルがあまりに高かったので、今年はダメかも知れないと懸念していた。しかしその予想は裏切られ、昨年を上回る見事な候補作が揃うことになった。文芸ジャーナリズムは出版不況を喧伝し、文学の衰退を指摘する声も挙がっているのだが、同人誌のレベルは高く、これからの日本文学は同人誌によって支えられるのではないかとさえ感じられる。満場一致でまほろば賞に選ばれた中井ひろし「キリギリ

ス」は、盲目の女性の一代記だ。短い枚数にもかかわらずヒロインの人生の細部がしっかりと描かれ、度重なる不幸にもめげず前向きに生き続ける人間の強さが、独特の簡素な文体で活写されている。選者の三田は障害者の作文コンクールを選者などを務めているので、この種の作品はいろいろと読んできた。ここに書かれているヒロインの不幸は、とくに際立つほどのものではないのだが、驚いたのは作者の文体の強度だ。叙情を排し、余分な装飾のない文章でテンポよく書き切った文体によって、かえって詩を読むような気分が昂揚を感じ、ヒロインの輝くばかりのひたむきな生き方が目の前にうかびあがってきた。文学というものの凄味を感じさせる名作に仕上がっている。

特別賞となった石田耕治「坂を上りながら」は、戦後四十年くらいの広島を歩く人物が描かれている。歩くにつれて過去の断片が少しずつ記憶の中にかがびあがってくる。そうした展開はゆるい随想かとも思わせるのだが、歩いていく場所が広島ということで、過去の大きな不幸が予想される。作品はその予想に沿って、原爆で顔が変形した弟の描写に到るのだが、そのあたりの展開が予想を超えるままなまじさで、まさに息を呑むような凄惨な情景となって読者につきつけられる。家族に囲まれて弟が死んでいくシーンや、その前後の超自然的な出来事についても、そういうこともあるかもしれないと納得させるだけのリアリティー

がある。そこまで見てくると、前半のゆるい展開も、後半のカタストロフを際立たせるための意図的な構成かとも思えて、この作品も強く推さないわけにはいかなかった。

河林満賞に決まった緑町優「スミオ」は少女とも見紛う美少年と、ケンカに強い少女との美しい恋物語で、現代のメルヘンともいえるべき作品だ。美少年のイメージが鮮烈なものと、成長し変貌していくヒロインの姿を通じて、一途に少年のことを思うヒロインの健気さが強調される。一種のファンタジーなので、リアリティーを求める必要はないのだが、それにしても最後にヒロインが医者になるくだりはお金の話が絡んだりして興が削がれる。これはあらずもがなの成功譚で、少年が亡くなってヒロインが医大進学を決意するというくらいにとどめ、美しい寓話のままで終わった方が印象が強くなるはずだ。

惜しくも賞を逸した作品にも短く言及しておく。木戸順子「サンバイザー」は流産のあとで妊娠恐怖症になった女性の危うい精神状況を描いている。細部をしつかりと押さえた佳品だが、夫が浮気をしていると疑うくだりは、もつと妄想を強調した方が悲劇性が高まるのではないか。宇梶紀夫「刑事死す」は刑事が職務中に死ぬというだけの話。通俗小説に登場する英雄でもなく、純文学にありがちな人生に思い惑う人物でもなく、ごくふつうの刑事の誠実な生き方をとらえた着眼が秀逸だが、テーマとしてはやや地味

か。武田純子「森で」は占いに頼らないと生きていけない心の弱い女性を描いたもので、現代社会のある側面を衝いている。ただ同じ作者が過去に特別賞を受賞した、ひきこもりの少女を描いた作品のような、文学としてのイメージの美しさが後退しているように思った。



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マ
ネージャーを務めたかわら
文学修行
88 「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

素晴らしい書き手がいる

小浜清志

毎年まほろば賞の選考にあたって思うことは素晴らしい書き手が至る所にいるという驚きである。今回も六作品を讀ませていただきその感を深くした。

木戸順子「サンバイザー」は妊娠恐怖症に陥った女性の悩みを扱った作品である。何かと理由をつけては夫の要求を避けるようになって一年が経つ。それは離婚の原因にな

ることも理解はしているが、六ヶ月の早産で子を亡くした主人公の闇は深い。しかし、優しく接してくれる夫の寛容も、周りの心づかいもあるがどうしても性生活を拒否してしまう女性心理をたくみに描いている。サンバイザーという小道具の使い方も絶妙である。夫らしき人物と女性がホテルへ入るのをサンバイザー越しに見てしまうエピソードに対して、作者の筆はあまり深入りしないのは不満ではあったが実にうまく仕上がった作品である。

宇紀夫「刑事死す」は下肝を抜く迫力に充ちた作品である。タイトルからわかる通り刑事の登場する小説であるが、殺人事件の捜査を展開する警察内部のディテールや、犯人を絞りこんでいく過程は本職の手によるものだろうと思っていた。しかし、まったく異なる人生を歩んでいながらこんな作品が書けるとは実に驚きであった。取材をどのように展開したのかも非常に興味のある所ではあるが、作者の刑事に対するやさしさが主人公の父でもある警官の死までを描いた半生は心打つものがある。きつと作者は刑事に対する憧れがあり、その力がこの小説の熱になっっている。同人誌でこのような作品に巡り合えるとは感動である。

緑町優「スミオ」は不思議な作品だった。美少年スミオと男まさりの年上女性かつこの交流で話は進むが、スミオが難病に侵されるあたりからスミオの美しさよりも、かつこの医者志望へとスポットが移動する。スミオの病を治し

少し勉強を始めようと机に向かっていた。将来を考えると気分が減入っていきそうになった、その時だった。突然に周囲が茜色に染まったのだ。そしてピカドンの惨状が展開していくのだが、筆は迫力を持ち読み進むのが苦しくなってくる。被爆した弟の描写は私にとって初めて目にした文章だった。この作品は残さなくてはならないと思いを強くした。

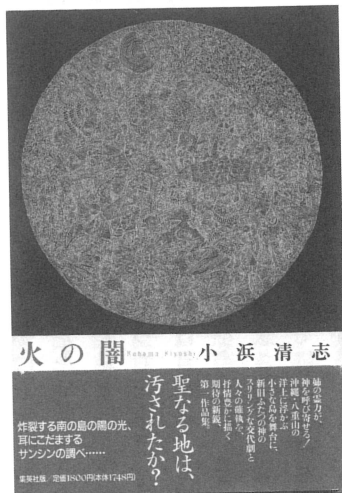
武田純子「森で」、人生とは選択のくり返しであろう。高校受験、大学進学、就職、結婚、生まれて二、三十年で四つの大きな選択をしなければならない。それが日常となれば限りはない。朝起きる、何を食べる、何を着る。出かける道順は？ 人間は何を基準にしてそれらの選択をしているのだろうか。作品の主人公朝井の基準は占いであった。朝のテレビで流れる占い師の言葉に従うのである。指定されたラッキーアイテムをコンビニで手に取る。そして、職場で上司から誘いをうけると友人にタロット占いを頼みその結果を行動に移すという、占いに人生を預けている。会社でウワサが流れる。勤務先が廃止されるという。翌日、正式発表があり、社員の身分は維持するがすべて東京本社へ異動。全員に動揺は広がり、朝井もまた不安に陥り友人にタロット占いを頼む。地元に残るか東京へ行くかを占って欲しいのだが友人は断ってくる。タロットの結果は意図して出せないが、解釈には私見が混じってくるのだ

たいという理由である。ケンカは強かったが勉強はいま一つであったかつこの努力はすさまじい。人間の強さとは明確な目標を持ったときから現れるということを知られる。一度目は受験に失敗するが一浪ののち見事医大に合格。しかし、スミオとの別れが訪れる。あまりにも儂いスミオの死ではあったが、かつこはそれからも努力をつづけ医者として一人立ちする所で物語は終わるが、読み終わってもスミオの美しさが残像となつてしばらく消えなかつた。スミオという美少年と、強くそして美しい生き方のかつこを描いていて清々しい。

石田耕治「坂を上りながら」、旧市立中学校で行われる慰霊祭に横浜から参加するために故郷の広島を訪れた川村は、坂を上りながら過去と向きあう。線路、路地、川沿いの道、橋をわたつて足を止める。ゆっくりと過去が甦ってくる。大学を卒業し地元銀行に勤めたが一年で退職し上京。広島はの惨事をテーマにした作品を書き残したいとの願望をひめて。職をみつめて生活を安定させ脚本家の許で勉強し、数年後にはテレビ局で仕事を始めるようになった過去。そして、昭和二十年八月六日午前八時十五分の記憶が明らかになる。ゆつたりと流れていた筆が急激に動き出す。八月六日の朝早く宿直明けの父が帰り、弟の「行ってきます」という声で川村は起きる。母は妹を連れて出かけていた。川村は工場を休み始めて三日目だった。今日から

と告白し、あなたの人生の責任はとれないと断る。朝井は仕方なく本屋で辻占いのページに出会い、辻を探しに店を出て空を見上げるといふ解決方法に気づいてこの作品は終わる。非常に興味深く人間の弱さに光を当てていると感じた。もつと深い所まで光が届けばなおよかっただろう。

中井ひろし「キリギリス」は見事な作品。六歳で失明した女の一生が精緻な筆で描かれている。失明の不幸に始まり、母の自死、盲学校で迎えた戦争。戦後父の食堂を手伝い、結婚相手に出会い、息子を産んだ喜びも束の間、父が死に、息子が交通事故死という不幸に見舞われる。夫が家を出て主人公は母の葬儀以来出会ったことのない伯母を頼ることになる。不幸をつみ重ねた小説ではあるが、人間の強さが光って美しい。目が見えなかったことが不幸ではなく心を闇にしたときが不幸だったとの述懐は重い。



「火の闇」小浜清志 集英社



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早大文芸科卒
79「流論の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

高レベルが揃う

五十嵐勉

第十三回まほろば賞には昨年に続いていい作品が揃った。どれが受賞してもおかしくないほどそれぞれの個性が光っていて、同人雑誌の作品のレベルの高さを感じた。質において商業誌以上のものである。たくさんの人に読んでほしい内質を備えていることをあらためて覚えた。

選考は接戦になるのではないかと予想したが、蓋を開けてみると、中井ひろし氏の「キリギリス」が特に高い評価を集めた。この作品は盲目の女性の一生を軸にしているもので、研ぎ澄まされた文章の切れ味が、悲劇への単なる同情に留まらず、絶えず生きる意味への問いかけとして鋭く、冷徹に投げられているところに、逆に哀切を深める結晶を

いと思いついて入っている現代の錯覚の構造を奇妙にダブらせてくことに、この作品の意図しない本質照射がある。強いインパクトを持ち、特別賞となった。

「スミオ」は美しい少年と逞しい少女のおもしろい取り合わせを軸にした、普通は通俗的になりやすい特殊な題材である。これが単に興味に流れずに、発展的な方向を辿るのは、筆者の建設的な姿勢によるものだろう。難病で死ぬスミオへの思いを受けて医学部受験に邁進する主人公の少女の姿は、確かに輝かしいものがあり、スミオが刺繍した遺品の衣装を来てアメリカへ飛ぶラストシーンは美しい。医学部の費用が用意されているなど、どこかうまくいきすぎ、作りすぎの印象を一方では覚えるものの、不思議な感動があることも否定できない。夢に賭ける翼を感じさせる筆致は買うべきものがある。河林満賞受賞は妥当と思えた。

読者賞、木戸順子氏の「サンバイザー」は、氏三度目のノミネート作品である。木戸氏は一作ごとに筆の陰影を深めている。流産のあとに不安に性恐怖症の心理の襞を絡ませて、夫婦の危うさを覗かせながら、大きな帽子を被って町を疾駆する。この陰影をさらに増幅させて、何か別の次元での生命への問いかけや秘密への落下などまで内世界を深化させればさらによかったと思えるが、結末近くになって、インターネットからの言葉や健康の回復によってあっさり元の鞘に戻る安易さが惜しまれる。力のある書き手な

得ている。素材を緊密な筆で緩まずに追い詰めていく彫琢の美しさが感じられた。脚の折れたキリギリスへの愛が生きていることの愛に重なって包んでいく結末は、特に見事で、人生への意味の深い問いかけとなって発光している。選考委員満票の受賞で、これはまほろば賞始まって以来の快挙である。これだけ完成された作品を書くこと、あとが逆にたいへんで、筆が重くなることも懸念されるが、中井氏にはそれを乗り越えるだけの力量がすでにあると思う。今後の作家としての健筆を期待したい。

特別賞の石田耕治氏の「坂を上りながら」は、原爆小説である。タイトルだけ見ると、何の変哲もない平凡な回顧として書かれているように見えるのだが、四十年以上前の広島自分の家のあったところを再訪するなかに、突然鮮やかに蘇ってくる原爆の記憶が、逆に唐突な異世界の出現を生々しく呼び覚まして、平穏な日常に起こり得る原爆の怖さを想起させる。前半のぬるさが、日常と現代のぬるさにかぶさり、後半の凄まじい現実が、核の現実の凄まじさとぶつかりあって、二つが同時に存在する現代を逆に照射する効果を上げている。被爆して顔がまったく変わってしまった、識別不可能なその人間に、何度も名前を聞き返すシーン、核爆発のリアリティが迫り、恐怖を呼ぶ。このリアリティこそが、核時代のリアリティであることが浮かび上がってくる。時を経て浮上してくるそれは、核爆発が遠

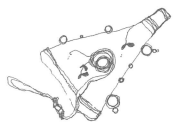
ので、もう一步踏みこたえて、さらに奥へ向かう冒険をあえてしてほしい。安定した力は、「渤海」の山口馨氏と並んで明瞭なので、あともう一作を期待している。

私は個人的には活劇が好きなので、宇梶紀夫氏の「刑事死す」も注目していたが、他の選考委員の支持を得られなかった。殉職した父親の「警察官には絶対になるな」という遺言に叛いてなった刑事の最期が躍動的に描かれている。拳銃殺人事件を追い、犯人を追い詰めていく過程は、警察の内部を経験しているようなりアリテイがあり、迫真の緊張感を醸してくる。ラストは犯人の拳銃で顎を撃ち抜かれて死ぬのだが、この壮絶な現場の生死の瞬間は、圧倒的なクライマックスを見せる。私はこの作品を買う。しかし、できるならば、事件ものとしての激烈な進行感に沿って、人間を描く筆がほしい。主人公の内面——残す家族のことや、残された母親のことや、命を失うかもしれない不安など、人間としてのやわらかな部分が死と隣り合わせのものとして浮かび上がるように書けば、もっと奥行きが深められただろう。純文学の立場からの刑事ものはあまり例を見ない。その新しい領域にぜひチャレンジしてもらいたい。

武田純子氏の「森で」は、占いに自分を委ねていた現代の彷徨いの生活の中に、新たな指針を見出すストーリーである。武田氏の筆は、現代的混沌の中にクリアな基軸を発見していく基本的な構造を有しているが、以前の「沈む

町」のほうがスケールが大きく、何でも包み込んでしまう多様性と広がりがあった。今回もそれに似た構造は有しているものの、やはり小市民的な小ささは否めない。ただ、どんな形でもそれなりにおもしろく読める筆力はあらためて示してもらえ、技量の確かさは太鼓判と言っている。あとはここに問題をごとまで現代としての普遍的な課題に拡大できるか、その意識を持つことだろう。「占い」では引きこもりはそこに載せられても、核の問題や都市文明の問題などは載せられない。しかし「霧」ならば、核も載せられるし、都市の大きな問題も載せられる。近所のおばあちゃんの意識も生活も載せられるのである。果敢に大きなものに立ち向かってほしい。

同人雑誌の中の誠実な、真剣な筆を信じている。その作品の存在は、けっしてその同人雑誌の中だけに留まるものではなくて、その存在がすべての同人雑誌や表現行為を支え、創造の営為を真底からのエネルギーとして自ら発熱し、屹立しているという絶対的な認識を持つてほしい。優れた作品は、それが読まれても読まれなくても、存在そのものとして人間を下から支えるものであることが、文学と創造の所以だろう。



代までの一步一步を、肉親の死、差別、時代や社会の波に苦しみながらも生き抜いていく様子が綴られている。だが、書き手が読者に期待しているのは憐れみの視線ではない。肉体の制限を超えたところで光を放つ美しい風景。キヨにとつての光は、まだ目が見えていた幼い頃の記憶の海の色である。この色だけは、どんな不幸が起ころうとも、彼女を裏切らない。疎遠にしていた伯母と再会して得た全体の仕事で生計を立てるようになると、客との会話が光になった。秋の夜寂しくなると、料理をしながら父との会話を思い出す。懐かしい記憶も光だった。そうしてキヨは、息子と声がそっくりな少年と出会う。強盗に入りキリギリスを置いて逃げていった少年への同情はやがて失ったわが子への思いと重なっていく。キヨはキリギリスの籠を抱いて寝て、生活を共にする。なぜなら、触覚の感覚で生きているキリギリスは、彼女自身だからだ。キリギリスのちぎれた足が糞の中に入っていたという記載は、彼女が自ら糞に触れて掃除をしていた、すなわち盲目の身で生きてきたことそのものの壮絶さを伝えているの言うまでもない。同時に、それでも、命がある限り光を求めめるのだということも。なぜなら、もう一度息子の声が聴きたくて、キヨはキリギリスを大事にする。息子は「母」のもとに戻ると信じていることも、光だった。心のひだにまで静かに差し込んでくるその光を、読者もききと感ずるに違いない。



なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマの旅」(集英社)を上梓
同年「彼女のブレンカ」(集英社)ですばる文学賞受賞
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語になるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中上健次と熊野—」(河出書房新社)「アジア熱」(大田出版)「シャーマンが歌う夜」「水の宴」(集英社)「海の宮」(新潮社)「熊野物語」(平凡社)「天狗の回路」(筑摩書房)など著作多数

生々しさへの共鳴

中上紀

長い梅雨が明けたとたん、エアコンなしでは息も出来ないほどの熱波に見舞われた八月の初め、第十三回「まほろば賞」の選考会が行われた。だが、私の胸に暑い何かが沸き起こる気がしたのは、気温のせいではない。文学というものに真摯な書き手たちの研ぎ澄まされた筆で綴られた選りすぐりの候補作品とその思い、響いてくる生々しい魂の叫びに、売れ行きばかりが重視される昨今の出版事情の中で冷え切っていた心が共鳴したのだ。

中井ひろし氏の「キリギリス」は満場一致、満点で「まほろば賞」受賞となった。盲目の女性キヨが、大正から現在「特別賞」受賞となったのは石田耕治氏の「坂を上りながら」だ。そこに漲るのは著者自身が体験した原爆という負の力である。記憶に導かれ、主人公川村は、広島を訪れる。だが、列車を降り、無人の踏切に差し掛かった時、蘇ってきたのは家族の生々しい思い出だった。さらには、かつて平和だった頃の静かな街並み。近所の人々の懐かしい顔。それらすべてを、原子爆弾が打ち砕いてしまったのだと、戦争から遠い現代に生きる読者に突き付けるように、悲惨な記憶が幻影として挟み込まれる。川村は建物疎開作業に出ている弟を原爆で失った。

——そのとき、列の中から一人、人間ではない顔が出てきた。

弟だと確認するのに、辛うじて焼けずに残っていたベルトで判断しなければならなかったほどの、ひどいやけどだった。家に連れ帰り、皆で弟の世話をしたが、助からなかった。遺体の喉から空気が出たときの音が、「おかあさん」と聞こえ、母が泣き叫んだ場面は、何度読んでも涙が出る。この作品はフィクションの形を取っているが、まぎれもない事実であるとも言える。主人公が体験したこと似たことが、幾千幾万もの幸せな家庭で起きていたのだから。その夜、彼方の山々のあちこちから、たくさんの火の玉が天に昇っていく様子を、川村は見る。恐ろしい光景である。だが、描写は美しい。美しいからこそ、余計に「お

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程（改訂）

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。最優秀賞「まほろば賞」には賞金10万円と賞状・記念品を、優秀賞には賞金2万円と賞状・記念品を贈る。（賞金は、できる限り有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する）
- ② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ね、最優秀賞「まほろば賞」その他を決定する。
- ③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。
- ④ 次点には特別賞を授与する。特別賞賞金5万円および賞状・記念品を贈る。
- ⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。五十嵐勉賞など。
- ⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。
- ⑦ 読者賞の投票は極力選考会までに行う。
- ⑧ 河林満賞は賞金5万円と賞状・記念品を贈る。
- ⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。
- ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
- ⑪ ポピュラー（大衆）部門、評論部門も設ける方向で整えていく。

●この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただくことを切に願いますしだいで。

2015年6月24日（改訂）

全国同人雑誌振興会
文芸思潮

ぞましい」。ずっと語り継ぎたい、残していくべき小説である。

「河林満賞」を受賞したのは、緑町優氏の「スミオ」だ。喧嘩の強い「あたし」かつこは、一つ下の美少年スミオが気になり、女装させて遊んでいた。かつこはスミオの美しさ、スミオはかつこの強さに憧れていた。だが、スミオは難しい病気を抱えており、年齢を重ねるごとに弱っていく。中学生になり、昔女装させて外を歩かせたことを謝るかつこに、スミオは、自分は「自由に歩いていたいんだ」と話す。そして、その「自由」を、化粧をし、母の赤いワンピースを来て病院内を歩くことで、再び叶えた。その、儚い命の灯の最後の輝きは、涙を誘う部分である。スミオは亡くなる。だが、物語は悲劇で終わるのではなく、かつこが「次の百人の」スミオを助けるために医者の道を進むというその後の展開が、前向きな未来を読者に提示する。また、男勝りだったかつこだが、スミオの手刺繍の花があらわれたブラウスを纏うと、いつの間にか似合うようになっていくことに気付くといった、一人の女性の青春物語としての要素も見逃せない。読み終わったあと、胸がぐちゃぐちゃになっている自分に気付いた。

どの作品も本当に素晴らしかった。木戸順子氏の「サンバイザー」は、夫に触れられたくない妊娠恐怖症を扱った作品であった。共感する読者が多そうだ。武田順子氏の



まほろば賞選考会風景 2019.8.4 大田区民プラザ会議室で

「森で」は、自由であり、無数の選択肢があるがゆえ、より良い未来を求めすぎて占いにばかり頼ってしまう現代女性の影の部分が描かれる。宇梶紀夫氏の「刑事死す」は、父親の「獅子になれ」という言葉に翻弄される刑事の物語だ。走り抜けるような展開に、映像が生き生きと浮かんできた。



石田耕治



いしだ こうじ

1930 広島生まれ

広島大学政経学部卒

旧制中学4年の時、自宅で被爆。動員で被爆した弟が翌日死亡

旧制高等学校時代に同人雑誌に習作を発表。大学卒業後銀行に就職するが、一年で退職して上京。原爆を「頭で知った事実ではなく、手足で感じた情景」として描き続ける「飢えの原因」「靴」「雲の記憶」「死の壁の中で」「この日」「相生橋」など

特別賞 受賞の言葉 石田耕治

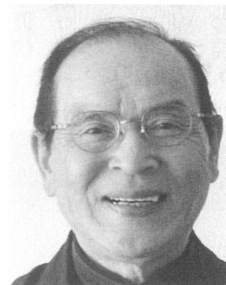
広島原爆をテーマにした作品ばかり発表してきました。お世話になった評論家佐々木基一さん、小説家井伏鱒二さんに事あるごとに小説家への助言を受けましたが、自分の意志を通してきました。

その甲斐あって、今回のまほろば賞特別賞受賞は、自分の意志が貫かれたことを証すものとして非常に光栄に感じています。私の作品を選んで頂いたことに深く感謝します。

特別賞

受賞の言葉

石田耕治



なかい 中井ひろし

1947 北海道 上川郡美瑛町生まれ

67 鯉淵学園卒業

70~ 鷗川町の劇団「むかっぺ」に所属し、「青年団」「鷗川高校」など脚本を10作品以上執筆上演／道文化団体協議会賞受賞
92 小説「旅の終わり」で第1回苦民文学賞受賞

94 小説「鏡」で第3回苦民文学賞受賞

98 「地上」創刊50周年記念論文 佳作

2017 小説「生きる」で室蘭文芸賞佳作

13 「いづみ同人会」（苦小牧に入会）以来同人誌「響」に創作・論文など掲載

17 同人誌「ざいんの会」（室蘭市）に入会、現在に至る



この心情が私の生きてきた芯だからです。今回の作品「キリギリス」のモデルは母と伯母、母の従姉妹で、多くはフィクションですが、不幸の数々は事実です。少年時代の記憶をたぐり寄せ、生命の重さを噛みしめながら作品を紡ぎました。彼女らを世に出すことで、尊い人生でしと言ったあげられるような気がします。私は今、作品を読んでいただけた喜びで心は満たされています。これからも新しい発想と切り口で不条理な世の中を、ペンの力で闘えたならばと、書き続けていきます。

まほろば賞

受賞の言葉

中井ひろし

安藝文學



87号



57号